様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　４月２０日現在

機関番号：10101
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2008～2012
課題番号：20243010
研究課題名（和文）アジア主義のビジョンとネットワークに関する広域比較研究

研究課題名（英文）A comparative study of Asianism across Asia from the perspectives of vision and network.

研究代表者
松浦　正孝（MATSUURA MASATAKA）
北海道大学・大学院公共政策学連携研究部・教授
研究者番号：20222292

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：政治学・国際関係論
キーワード：アジア主義、地域主義、ネットワーク、アジア観、植民地主義

１．研究計画の概要

本研究は、これまで日本の侵略・戦争をもたらしたイデオロギーとして、あるいはアジアの解放を目的としたイデオロギーとして論じられてきた「アジア主義」を再検討し、相対化しようというものである。従来、日本のアジア主義研究は、言説分析に偏り、また、専ら戦前日本の戦争・植民地支配の責任論及びそれへの反論として、パターン化されてきた。こうした閉塞的状況を打破し、日本とアジア地域との関係について新たな視角を探ると共に、近年著しく経済発展を遂げ、緊密化するアジアの現状を踏まえて、アジア諸国から提示されている新たな地域主義の動向をも視野に入れ、多様な「アジア主義」の可能性を実証的に検討することが、本研究の目的である。研究の遂行にあたって、

（１）アジア主義でイメージされる「アジア」の構成や物語（ビジョン）を明らかにすること。一般に日本人が当然のものとしてイメージしている日本を中心としたエスノセントリックなアジア主義像を相対化するために、他の民族や地域などで抱かれているアジア観やアジア主義概念の具体的な像が多様であることを明らかにする。また、海外で論じられているアジア主義と国内のそれとのギャップを明らかにする。

（２）アジアを区切られた地理的なものとして所与の概念として捉えずに、その地域概念の生成過程を具体的に明らかにする。即ち、ヒト・モノ・カネなどの交流や移動に付随したネットワーク、海のつながりと陸のつながり、西洋帝国主義や白人種中心主義というアンチ・テーゼへの対抗、自国の政治的・経済的利益のために操作される装置、アジア域外の勢力（アメリカ、ソ連、ヨーロッパの帝国など）による文化・イデオロギー工作、宗教や言語などのいわゆる文化、歴史意識といった域内・域外の諸要因との関係で、アジアという観念がどのように形作られていったのかを明らかにする。

（３）上記２つの作業と、アジア全域（地域としてのアジアを越えたアジア太平洋地域を含む）のアジア主義の比較、さらにはヨーロッパ連合との地域主義比較を通じて、アジア主義というものがあるとすれば、それは何なのか、それが有意なものとして存立・発展していくことができる条件や可能性とは何なのかを明らかにすることを目指す。その上で、アジア主義と言われる思想を改めて具体的に地域主義や現実との関係で位置づける。

それらを通じて、アジアにおける各国家・政治主体・住民の共生の方向を示すことが、本研究の最終目標である。

２．研究の進捗状況

（１）本研究は、２００８年８月以来、３年度目である２０１１年１月に至るまで、基本的に１年度２回、６～８人程度による報告とそれをめぐっての議論を集中的に行う研究会を行ってきた。その際、①日本人研究者による地域研究・外国研究者のみならず、アジア地域のいわゆるネイティヴの研究者をできるだけ招き、お互いの問題関心が如何に異なるかを認識することに努めた。アメリカに併合されるまで英語以外の固有の言語と文字を持ち得たハワイ人によるハワイの歴史とアジア観を明らかにした、全く面識の無かった第一線のハワイ人ネイティヴ研究者を招き、既成観念と異なる知見を得たことなど、その一例である。この他、中国人、台湾人、香港人、韓国人、モンゴル人、インド人、フ

ィリピン人など一流の研究者が集まった。②研究会はセミ・オープン・システムとし、組織メンバー以外からも一流と考えられる若手・中堅・ベテランの研究者を招き、大学院生らの参加を奨励し、活発な議論を行った。その結果、参加者は当初より膨れあがり、外部参加希望者も増え、新たな交流・教育や相互刺激の場となった。

（２）組織メンバーは、国内外における資料収集や学会発表等を通じて分担するテーマについての研究を進め、研究会報告などを通じて、その成果を各方面で刊行している。『大亜細亜主義』のような貴重な基礎史料の復刻刊行も行い、アジア主義研究を大きく進めた。

（３）メンバーは、主要学会などで積極的に成果を発表し、その効果もあって、アジア主義研究は今や学界の一大トピックとなった。特に世界歴史者会議（アムステルダム）、日本政治学会、日本国際政治学会などでは、複数のメンバーが報告者となった。

３．現在までの達成度

②概ね順調に進展している。

（理由）

５カ年計画の３年度目を終え、４年度のイスラームをめぐる研究会を残して、当初予定していた通り、概ね主要な地域や要因の代表的ケースを検討した。①いわば空間軸において広域比較を行い、②それと共に、アジア主義に関わる多くの発見が次々に広がりつつあり、③如何に多様なアジア主義があるか、従来の日本におけるアジア主義を相対化することができた。④時間軸においては、これまで分断して論じられていた戦前と戦後との連続性を論じることができ、⑤域外要因や「コンタクト・ゾーン」、グローバル・ヒストリーとの関係にも踏み込めた。さらに、⑥従来、戦前の思想史分析に傾斜しすぎたアジア主義の観念を打破し、外交史・国際政治・経済との関連を明らかにすることができた。

残っているのは、４年度目に解決を予定しているイスラームという大きなファクターをどのようにアジア主義との関係で捉えるかという問題と、これまで明らかにしてきたアジア主義の各ケースの実態をどのように理論的に整理するかという課題である。また、各研究を論文集という一つのまとまった成果とする作業も残っている。

４．今後の研究の推進方策

４年度目は、①イスラームを中心とする研究会を６月に行い、新たな議論の方向性を打ち出すと共に、②アジア主義とは結局の所何なのか、について、時期区分を含めて、プロジェクトとしてどのように定義づけるかという議論を最終的に行わなければならない。また、それに基づいて、③各メンバーとこれまでの報告者が論文執筆や翻訳を行い、最終年度における論文集刊行と総括・発表を行う。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 71 件）

１．大賀哲「国際政治学における地域主義研究の動向と課題――東アジア地域主義論についての予備的考察」、法政研究 77 巻 1 号、P.65-97、2010、査読有

２．中島岳志「アジア主義とナショナリズム」、鶴見俊輔【編】『アジアが生みだす世界像――竹内好が残したもの』（SURE）、P.16-63、2009、査読無

３．大庭三枝「グローバリゼーションの進展とアジア地域主義の変容」、国際政治 158 号、P.75-88、2009、査読無

４．山室信一「東アジアにおける共同体と空間の位相」、環 35 号、P.189-201、2008、査読無

〔学会発表〕（計 34 件）

１．YOSHIZAWA, Seiichiro, “Economic Transformation in the 19th-20th Century China: A Comparative Study,” 21st International Congress of Historical Sciences, Amsterdam University, Netherlands, 2010.8.24

２．高橋正樹「タイにおける“アジア主義”――タイの地域主義概念の歴史的考察――」、日本国際政治学会（つくば国際会議場）、2008 年 10 月 25 日

３．姜東局「東アジアの観点から見た安根重の東洋平和論（韓国語）」、韓国政治学会（韓国外国語大学校、ソウル）、2008 年 10 月 24 日

〔図書〕（計 12 件）

１．松浦正孝『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか――汎アジア主義の政治経済史』（名古屋大学出版会）、P.1-1,088、2010

２．浜由樹子『ユーラシア主義とは何か』（成文社）、P.1-297、2010

３．宮城大蔵『「海洋国家」日本の戦後史』（筑摩書房）、P.1-231、2009

４．大亜細亜協会【編】後藤乾一・松浦正孝【解説】『復刻版　大亜細亜主義』全 26 巻（龍渓書舎）、P.1-10,200、2008

〔その他〕

ホームページ

http://www.juris.hokudai.ac.jp/~matsuura/4-1.html